

ウォー、パトリシア『メタフィクション』 結城英雄訳、泰流社、1984、1986.

1 「メタフィクションとは何か」

・メタフィクションという言葉は、フィクションと現実との関係について様々な問題を提起するために、人口作品としての自らの地位二次意識的に、そして組織的に注意を向けている、フィクションの処方につけられた名称である。…ここ二十年以上のあいだに、小説家たちはフィクションを構築する場合の理論上の問題点をこれまで以上に意識する傾向にあったのである。（13）

・メタフィクションの言葉は、小説家ギャスによる論文（1970）がはじめ？（13）

・小説の特定の慣習を心身の対象とするもの、特定の作品やフィクションあるいはその様式を批評するもの、古い言語形式を暗示して新しい言語構造を示そうとするもの（16—17）

・メタフィクションは、60年代以降のイズムであると同時に、歴史上の様々な小説にも指摘できるような基本的特徴でもある。

・バフチンは小説の基本的原理を対話に見た、そこでは二つの声が異なる機能を有し対立するものであるがリアリズムのフィクションはそのような対立を解消、抑圧するものであり、バフチンが呼ぶ対話的小説にその打開策が予感されたが、メタフィクションはそのような解決の不可能性を顕示し、共有することで小説とは何たるかを示す。（19）

・メタフィクションの最小公分母は、フィクションの創造とそのフィクションの創造に関する陳述とを、同時に行うことである。この二つの作用は、「創造」と「批評」との区別を無効にし、それらを「解釈」と「脱構築」という概念に統合する、形式上の緊張としてまとめられている。（19）

・メタフィクションが反旗を翻しているのは、「現実の」世界の表面上「客観的な」事実などではなく、こうした現実感を維持し、是認してきたリアリズム小説の言葉なのである。（27）

・そのほかの類似する様式「内向小説」「反小説」「シュールフィクション」「自己生成の小説」「ファビュレーション」など。

「自己生成の小説」…「読者の読み終えた小説を、その登場人物がペンを取って書き始められるまでのその成長を記した、通常一人称の叙述」（ケルマン、1976）。モダニズム的な意識に対する関心が中心であり、フィクション性に対する関心ではない。

「シュールフィクション」…フィクションのなかに語り手が登場する。関心がその語り手あるいは語り手たる諷刺家自身に向かっていることに特徴がある。

ロバート・スコールズによる「ファビュレーション論」（1975）…読者としてフィクションに期待するのは、日常性からではなくむしろ哲学性、歴史性のパラダイムにおいて認識機能を与えてくれ、経験的なモノの妥当性が喪失した後に安定と安心をもたらしてくれることであると論じられるが、メタフィクションは、経験的および日常性の重要性を棄却せず、日常と神話性、哲学性の融和を試みる。

2 文学における自意識

・メタフィクションの諸特徴、侵入過剰、ありありと嘘をつく語り手、これ見よがしの印刷上の実験、読者のあからさまな劇化、入れ子構造、呪文のようなばかばかしい列挙、過剰に体系化あるいは顕在的に配置された構造という手法、物語の時間的・空間的構成の全面的解体、無限後退、登場人物の非人間化・諷刺的分身、自己照射的イメージ、物語内における当物語をめぐる批評的論議、特定のフィクションの慣習の継続的切り崩し、大衆向けジャンルの利用、先行するテクストに対するあからさまな諷刺など。こうした特徴のどれをとっても、そこで前景化されているのはテクストの書法であり、書法がそのテクストのもっとも根本的な問題点となっている。（44—45）